

齊藤茂吉全集

第七卷

巖流島

大正十年十月二十六日、私は熱田丸に便乗して横濱を出帆し、十一月一日に船が神戸を解纜しようとするとき、中村憲吉君は「宮本武蔵」といふ書物を餞別に呉れた。この書物は明治四十二年、宮本武蔵遺蹟顯彰會から編纂になつたものである。船が神戸を出て瀬戸内海あたりを行くころ、私は其の書物を少し拾ひ讀みした。

熱田丸は十一月二日午前八時に門司に著き、出帆まで一晝夜以上の餘裕があるので、船客の多くは外出した。下關、門司を見物するものもあり、遠く福岡・耶馬深・大分あたりまで行くものもゐた。私も人並に門司方面に上陸して見ると、形式的であるが税關で荷物の検査があつたりして洋行の旅の第一歩といふ氣持がもう其處にあつた。それから砲兵の一隊が屯して居り、一人の士官が「馬と車輛の相互の検査！」などと切口上にいふ命令をも、私は一人の旅人として其を受入れてゐた。其處に電車が引かれてゐて電車の案内繪圖を見るに巖流島といふところがある。私は突壁の間にそこに行く氣になつた。

電車に乗つて延明寺で降りてその遊園地を見た。長州奇兵隊戦死墓、慶應二年丙寅八月建立などといふ墓碑があり、梅津熊之進、征見與五郎、春日與七、山城平吉、橋式部、矢玉助太郎、藤野波太郎、山本宗之進、などの名が見えてゐる。また同じ長州人の、柏村樸之丞、徳田啓藏、柏村作右衛門、徳田徳三郎、西安太郎、池田造酒之進、山田辰雄などといふ名も見えてゐる。慌しい心で讀んだのだから讀錯などもあるかも知れない。是等の人々はこのへんで死んだものと見え、路傍の草の露がいまだ乾かず、其處から田圃の方に降りて行くに、稻は既に刈られて蝗がしきりに飛んでゐる。私は延明寺住宅經營地などいふ木柱の建つたところの崖を下りて田圃を越して道に出た。そこに宮本武蔵碑が建つてゐて、『天卿賞相圓滿兵法逝去不絶』などといふ句が彫つてゐる。

私は電車で大里に行き、巡航船で江浦まで行つた。巖流島は昔から船島ともまた向島ともいつて居る。此處からは遙か向うに、岸は石垣で堅められ、中ごろに松の大樹が數本立つてゐる。もとは小山であつた處をくづしてゐるらしく赤土の丘が高く聳えて見えてゐる。それから家が數軒見え、帆船が數隻泊つてゐる。

私は大分待つてやうやく渡船で島に渡つた。渡守の爺がゆくゆく話するを聞くに、この島に日清戦争ごろ避病院が建つたさうである。それも何時か廢せられ、其處に住むと魔物に憑かれると

云つて誰も住む者が無かつたのに、三菱が測量に來たり船大工がやつて來たりしてゐるうち、二十日も立たぬに神戸の鈴木が買取つたといふことである。なるほど上つて見ると、神戸鈴木造船所といふ立札も見えてゐる。それは大正四年ごろと思はれるが、石垣を岸に築いたのは、明治四十一年ごろであらうか。巖流島の岸には先程江浦からも見えたやうに帆船が泊つてゐる。その中には伊豫波方村神丸などといふのがあつたりして、何か知ら旅情をそそり、また、家鴨が波打際に集つてこの島に流寄る野菜の屑を奪合つて食つてゐる光景などもまた棄てがたいものである。

慶長十七年の昔、佐々木小次郎巖流といふ劍客が宮本武藏のために打たれてこの島で死んだ。巖流島といふ名もそれに本づくのであるが、『死骸はそのとき小倉の方に持つていんだものぢやらうと思ひます』などと船頭の爺が話をしながら船を漕いだ。この島に住むと魔に憑かれるといふのは、巖流への同情に本づく心理なのである。此處に、佐々木巖流之碑があるのは近頃の建立で、明治四十三年十月三十一日、舟島開鑿工事成工之際建之、井上良三郎、北村龍三郎、栃木順作等なほ五六の人名が彫付けてある。おもふに巖流の墓はそれまでは此處の島には無かつたものではなからうか。或は武將感狀記の『巖流が墓を築いて今に其跡あり』といふのは、その墓がしばらく絶えてゐたのであらうか。

慶長十七年の二人の勝負の時には、辰の上刻までに兩名とも島に到着すべき約束であつたのに、武藏は故意に時間を後らせ、巖流をして非常に待あぐませてゐる。そして巳の刻過ぐる頃漸く島に著いてゐるから、巖流の氣を三時間もいらいらせしめてゐる。それから武藏が島に著くや否や巖流が怒つてなせ時間に後れたるかをなじるに、武藏はそんなことは聞えぬといふ振をしてゐる。それから、巖流が益々怒り太刀を抜いて鞘を海中に投じたのを武藏は冷笑して、小次郎既に負けたりなどといつてゐる。これは一種の氣合であり、暗指であり、此處に至つて巖流はもはや闘はぬ先に精神的に負けてしまつてゐる。それから巖流は刀を以て渡合ふに武藏は重い木刀を以てし、巖流の刀の刃の武藏に及ばぬ先に、重量の大きい木刀は巖流の頭蓋を打くだけにしてしまつた。これははじめからの武藏の戦術で、巖流ははじめから武藏の術中に陥つたと謂ふべきである。

當時の勝負は、分けて怨恨のための勝負ではなく、單に技を較べるといふ名目であるが、較技といふのは眞劍勝負なのであるから、負ければ一命を棄てなければならぬ。そこで較技といふのは單に劍術の勝負ではなく、それ以外の戦術があるわけである。武藏は以前から、この戦術をさかんに使つて居て、それを智術とも云つてゐる。また、武器の選擇については『武器の利をわかまゆるに何れの道具にても、をりにふれ時にしたがひ出合もの也』と武藏自身云つてゐるから、武藏が小次郎との勝負に木刀を用ゐたのなどもやはり智術の一端と謂ふのであらうか。

併し私は巖流島を訪ねて来て、寧ろ巖流に同情したのであつた。いろいろ智術をやつてゐる武藏を寧ろ私は憎悪した。幾ら智術だなどと云つても三時間も故意に敵をいららさせるなどは如何にも卑怯者であり、また一方が剣で闘ふなら一方も剣で闘はなければ、剣客の勝負としては、私は面白くない。斷りなく通知なくして木刀を使つたなども、卑怯者の所做である。武藏は六十度も眞劍勝負をしたといふから、餘りその勝負の骨を呑込み過ぎてゐて私には面白くない。私はそんなことがいろいろ胸に往來し、暫く鈴木造船所の帆船を造るところを見てゐたが、武藏の所做をひどく悪みながら此島を去つた。

江浦はいまだ新開の地で、三菱のドツク第一第二第三号などがある。雜貨店、八百屋、菓子屋、呉服店なども皆新しい。御料理あら玉などと看板のかかつたところがある。酒屋があり精米屋がある。馬關出張の教法寺といふ眞宗の寺がある。何だか誰かの別荘のやうな趣で、なかに娼と稚兒のこゑがしてゐる。また日蓮宗護國寺出張所などといふところもある。また日本製氷株式會社江浦出張所などもある。縦覽謝絶 no admission 一などと書いてある。此處の境内から直接船に穂の如きものが作りつけてあつて、瀧のやうに氷が船の中に落ちる光景なども私にはなかなかめづらしい。

その日ゆふぐれて、大阪毎日新聞社關門支局長の藤井公平さん、大阪商船株式會社の奈良秀治

さん、畫家の山口八九子さんと四人して下關の名所を見物し、その夜は萬歳樓で河豚をむさぼり食つた。座に來た女が、『やつぱり兄さんやな』などといふ関西辯も私にはやはり珍らしく、その夜ふけて其處を辭した。

しづかに古へ人をしたふ心もて冬の港をわたりけるかな

わが心いたく悲しみこの島に命おとしし人をしそおもふ

はるかなる旅路のひまのひと時をここの小島におりたちにけり

かういふ短歌などを私は拵へたりした。翌十一月三日午前十二時に船は上海へ向つて解纜した。奥大利の維也納に丸一年半あるうち、友から贈られた「宮本武藏」を繙き、武藏の兵法の奥義などを讀んで『能く習ひ得て鍛煉有べき義也』などいふ語句にしばしば逢著しても、武藏がこの鍛煉で巖流の頭蓋を打くのだと思ふと、私の心はひとりでに武藏の兵法を憎悪した。特に教室に於ける私の爲事がかどらず、論文がなかなか出来ないときに、この書物などを讀むと、益々私は武藏のベテニ術鍛煉法を憎悪したのであつた。時には書物を牀上にはふり付けたことなどもある。それほど私の心はいらいらして居た。

維也納を去つて獨逸に轉學するとき、私は不要一切を荷にして日本に送つた。その一部が火災のとき水を浴びて焼けずに残つた。

「宮本武藏」といふ書物も焼けずに残つたもの一つである。歸來寧日なく、はや七年目の年月を送りつつあるので、武藏の兵法のことなどは遠に忘却してゐたのを、文藝春秋社の短文の需に應ずるために久しぶりでおもひ起したのである。

私はこの短文を書きつつも、巖流島仕合の後、天下無敵新免武藏として名を轟かし、六十四歳の天命を完うした彼を、私はなほ卑怯ものとするの念を脱却することが出来ない。(昭和五・六・

十九)

巖流島後記

「巖流島」といふ小文を書いて、雑誌文藝春秋に發表すると、菊池寛氏は、直ぐその號か、その次の號に異見を公にした。

菊池氏の意見をその儘ここに引用することは出来ない。(その意見の詳細はもう忘れてしまひ、文藝春秋も無くしてしまつたからである)。が、大體をいへば、齋藤茂吉は、宮本武藏のことを彼此いつたが、武藏はやはりあの時代のもでは一番強い。それだから武藏を尊敬して居るといふのであつた。

それから、京都に居る有名な二刀流の劍士某氏が、やはり私の小文についての異見を、ある雑誌に公にし、その雑誌の寄贈を受けたのであつたが、その某氏の意見といふのも、やはり武藏は強い、天下無敵であるといふに過ぎぬので、さういふことを云ふ二人の『感情背景』とでもいふべきものを洞察すると、『劍のことを何も知らぬ齋藤茂吉などには、武藏について彼此いふ資格が無い。黙つて居れ』といふのであつた。菊池氏はそれほど露骨には云はぬが、劍士某の如きは